



第4回：社会保険労務士合格直後に人事部から転出

(株)田代コンサルティング代表 社会保険労務士 田代英治

●3度目の試験で合格

2回目の試験では、勉強も気合も不足していたように思います。何が何でも合格しようという気構えがなく、無事に受験できたことで満足してしまったのかもしれませんが。結局、あと一步のところでは不合格となっていました。もう1年続けるかどうか、かなり悩みましたが、結局、翌年(1997年)明けくらいから勉強を再開しました。

1993年1月に人事部に来てから4年が経過していました。先例からするとそろそろ異動があっても不思議ではない時期に差し掛かっていました。社会保険労務士試験は7月下旬、その前に会社の定期異動日(7月1日付)がありました。

もし、7月1日付の異動で、他部署へ転出したら(特に海外勤務となってしまうたら)、受験することすらできないという不安を抱えながらの受験勉強でした。この年も前年同様、5月～6月は新卒採用活動で、会社説明会や面接のため、全国を飛び回っていました。

幸い7月1日付の人事異動はありませんでした。勉強不足は決定的でしたが、これが最後のチャンスであり、精神的にも後が

ないという気持ちで臨みました。

3回目の受験も手応えがなく、自信はありませんでした。霞が関まで合格発表を見に行くこともなく、半ばあきらめていましたが、発表の翌日自宅から合格通知が来ていると会社に電話がありました。何とか結果が残せて良かった、努力が無駄にならずに良かったと心からそう思いました。

●予期せぬ営業部への異動

合格発表は11月初め頃だったと思います。合格した後のことは考えていませんでしたが、取敢えず勤務社会保険労務士の登録だけはしておこうと思いました。人事労務の実務経験は5年ありましたので、会社に証明してもらって、11月中に登録手続きをしました。

そして、翌12月の上旬、私は上司から応接室に呼ばれ、異動を告げられました。会社には自己申告制度があり、異動先の希望を3つまで書くことができました。上司との面談で、私は法務部や財務部などの管理部門を希望していると話していました。

確かに人事部に異動したばかりの頃は、1日も早く古巣の営業部に戻りたいと泣いていましたが、5年の月日が経ち、公的資格も手にした私は、これからは会社の管理

部門でキャリアを積んでいきたいと考えていました。上司にもそのことを理解してもらっていると思い込んでいました。

応接室で上司の口から出たのは、「営業部に戻ってくれ」という言葉でした。5年前までの営業部時代はそれなりに実績を上げていましたので、それが評価されたのかもしれませんが、営業部への異動は私の頭の中にはありませんでした。

会社の花形部門で誰もが行ける部署ではないと言い聞かせて、再び営業の世界に舞い戻りました。そこでは、船のスペースと船積貨物の調整や船舶の安全運航を管理するのが主な仕事で、社会保険労務士の資格など必要のない毎日でした。

結局、1998年1月から3年半在籍しましたが、24時間365日休みのない、本当にタフな仕事でした。毎日、難しい判断の連続で疲労困憊していましたが、ねをあげることもなく、頑張っていました。

●再び人事部へ

2度目の営業部での勤務は、トラブルシューティングの連続でしたが、おかげで精神的にタフになりました。また、英語も上達し、海外のスタッフとも密なコミュニケーションを取り、信頼関係を構築することができました。

しかしながら、営業部に長く在籍するの

は精神的にも肉体的にも辛く、2000年の自己申告では、「将来は人事部か法務部に行きたい」と上司に訴えました。それでも、実務の中心的役割を担っていましたので、すぐには異動できないだろうと思っていました。

2001年4月、私はその部署で課長に昇進しました。昇進したことはまったくうれしくありませんでした。もうここに骨を埋めるしかないのかとあきらめました。定期異動日である7月1日が近づいていましたが、自分には関係ないと日々の業務に打ち込んでいました。

意外にも、7月1日付で人事部に異動という内示を受けました。役職は労務担当課長ということで、人事制度や労務問題を扱うことになりました。ラインの課長からスタッフの課長ということで降職となりますが、そんなことは関係なく、再び人事部に戻れたことをうれしく思いました。

しかし、3年半のブランクは大きく、かつての業務経験や社会保険労務士試験の勉強で身に付けた社会保険や労務関連の知識はさびつき、この間の法律改正などにも追いつけておらず、3年半前の状態まで戻るのが大変でした。しかも会社は、この年の4月から成果主義型の新人事制度を導入し、その運用をどうするのが、私に与えられた最大のミッションでした。

